

乙 貞

第168号 通巻29巻 第5号
平成22(2010)年1月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
Tel・Fax 077-585-4397

〒524-0212
守山市服部町2250番地

発掘調査だより

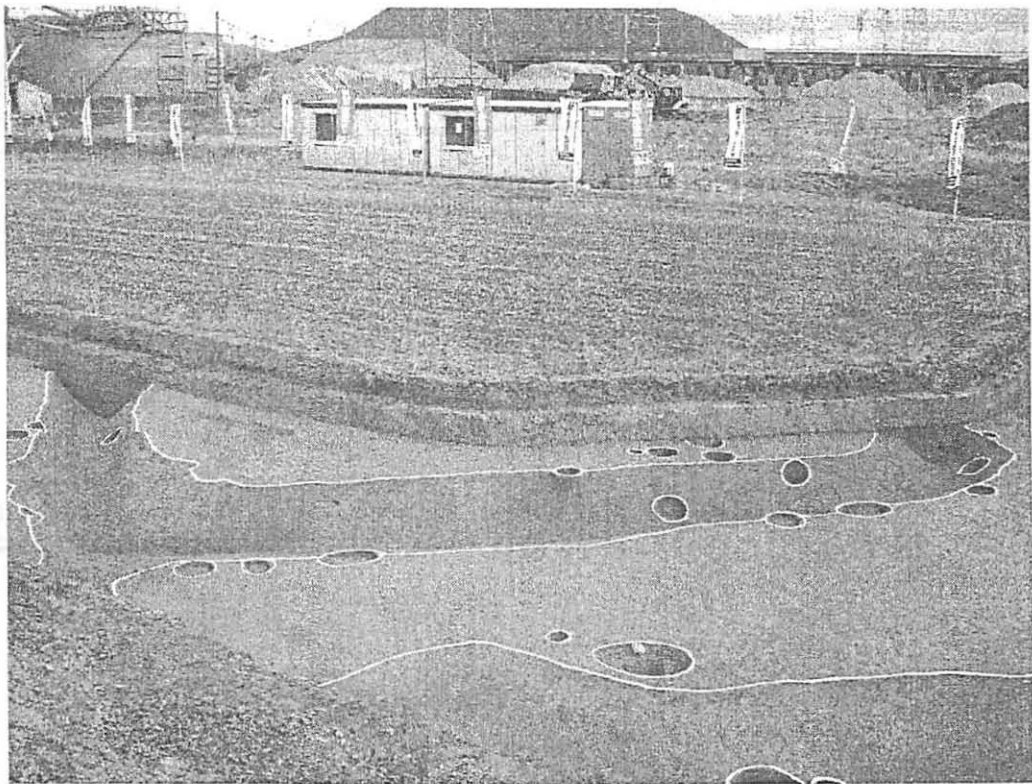
1. 立入荒牧遺跡の調査

立入町字トヒ地先において、宅地造成工事に伴い約264㎡を対象に、11月24日から12月24日まで発掘調査を実施しました。当遺跡について、1988年に行った調査では、古墳時代の古墳や竪穴建物、古代から中世にかけての溝などが見つかり、周辺に残る寺山古墳等との関わりや、室町時代にこの地に在ったと言われる立入宗継の居城、立入城との関係などが示唆されていました。今回の調査では方形周溝墓もしくは古墳が想定されるSX-1と、それとほぼ同時期にあたる溝(SD-1)などを検出しました。

SX-1の主軸はほぼ南北方向を指向し、全容は不明ですが一辺約10.5mの方形が想定されます。周溝は緩やかなU字の断面形状を呈し、幅は約2m、深さは約0.5mの規模となります。周溝の底部から見つかった土器は、古墳時代初頭のものと思われます。また、鉄製の直刃鎌や、石製品等も出土しています。

SD-1は、幅は南から北に向かって大きく広がるものの、深さ約0.15m程度と浅く、土器もわずかに破片が出土した程度でした。

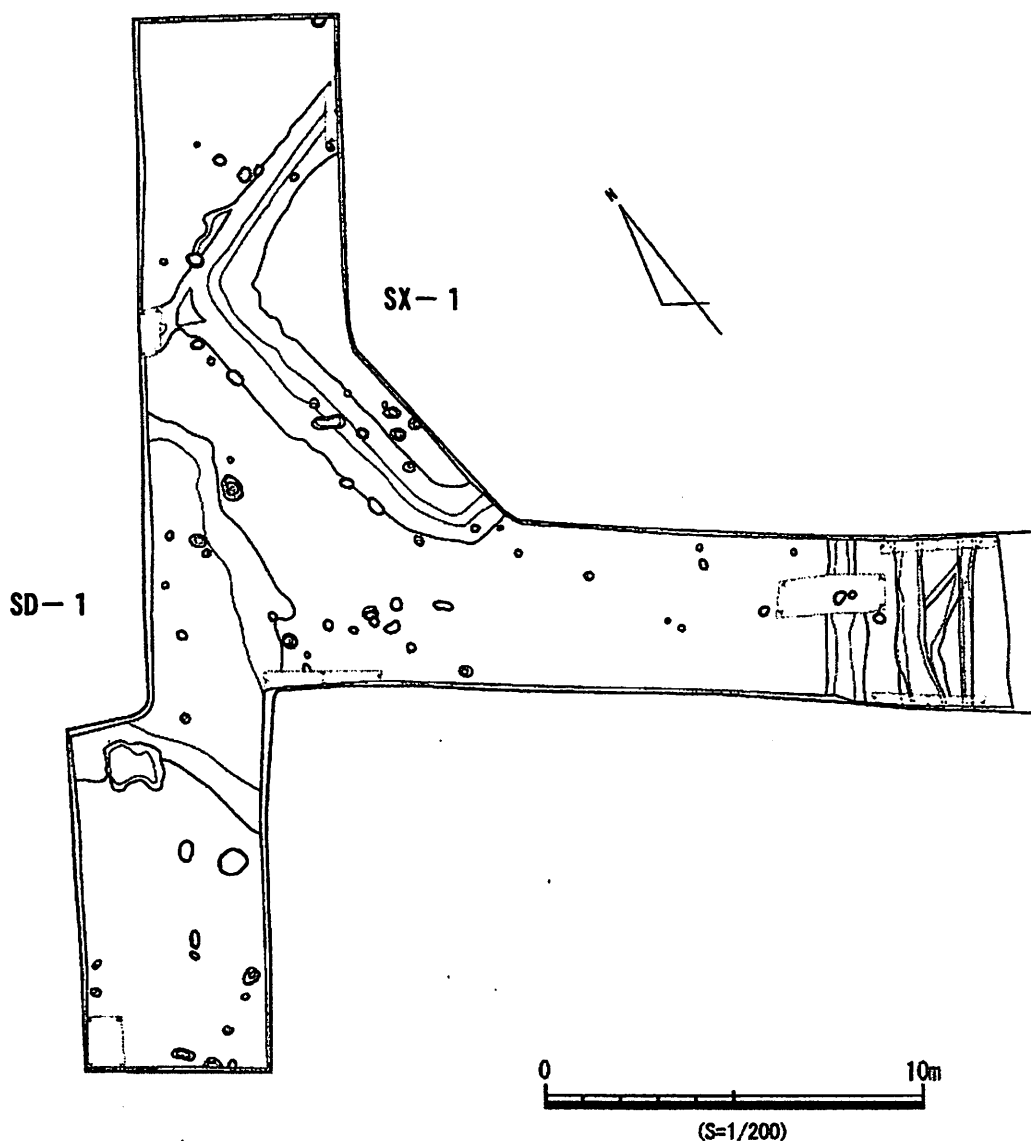
トレンチの南東部で見つかった3条の溝は、詳細な時期は不明ですが、須恵器片が数点出土していることから、少なくとも古墳



▲ 立入荒牧遺跡 SX-1

時代中期以降のものと思われます。なお、その下層から1条の溝を検出しましたが、遺物の出土がなかったため、上層の溝以前のものとは判断できませんでした。

今回の調査成果の中でポイントとなるのはSX-1です。全容が不明で、遺物の出土もわずかだったことから古墳である可能性は推測の域を出ません。しかし周辺地域では、現存する寺山古墳1・2号墳を含めてかつては数基の古墳があったことがわかっています。SX-1は、それらの古墳よりさらに前段階のものであり、今後さらに調査が進めば、周辺に点在する古墳の実態を理解するうえで非常に重要な成果となるでしょう。(木下)



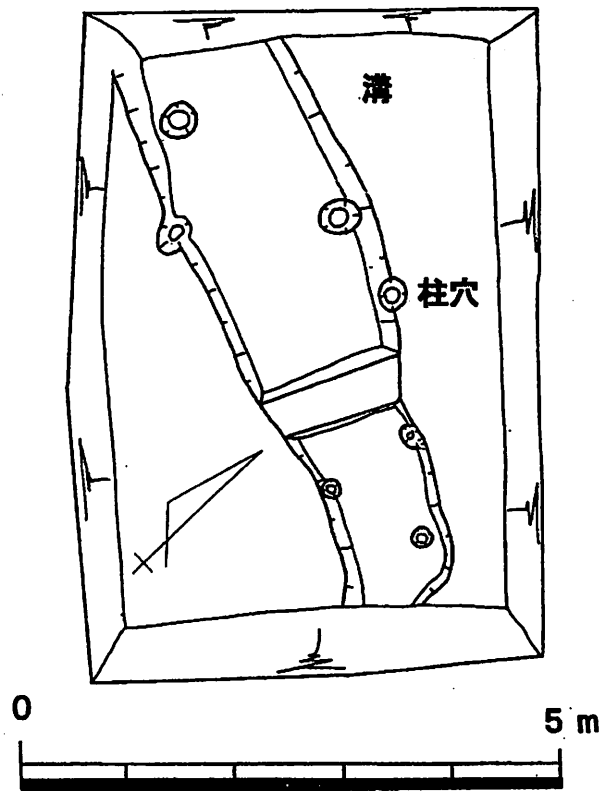
▲ 立入荒牧遺跡 遺構平面図 (1/200)

2. 赤目遺跡の調査

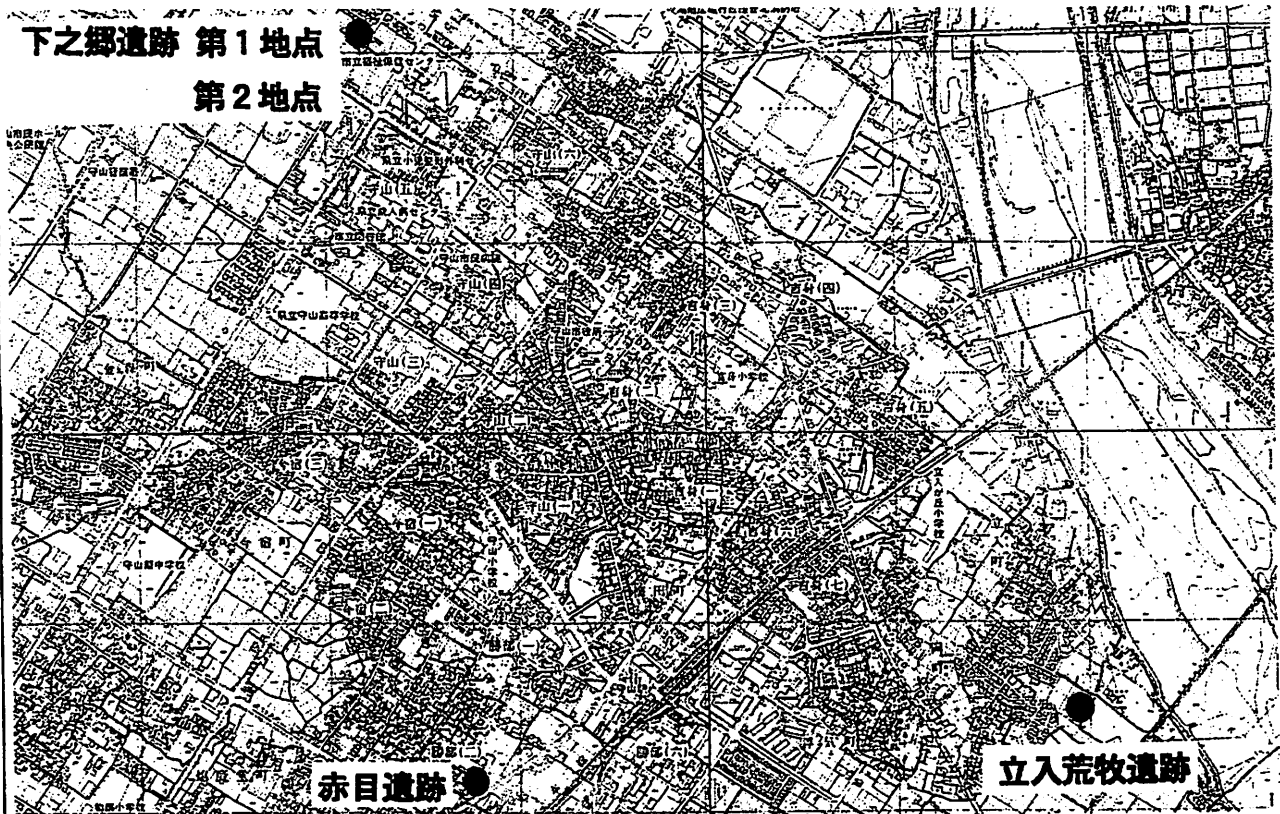
個人住宅建築に伴い、11月9日に試掘調査を実施しました。造成土、旧耕作土、黄灰色粘土層、約0.9mを除去した深さで遺構の検出を行いました。

見つかった遺構は、調査地の中央で溝1条を検出し、試掘坑をさらに広げて遺構の状況を確認したところ、幅1m~1.5m、深さ0.2mを測る比較的浅い溝であることがわかりました。溝は東西方向に伸びる溝で、灰褐色粘土層の埋土で覆われていました。

調査区の東隅では狭くなっており、南に向かって屈曲する様子がうかがえます。遺物は出土しませんでした。方形周溝墓及び古墳の可能性もあります。(伴野)



▲ 赤目遺跡 遺構平面図



▲ 調査地位置図

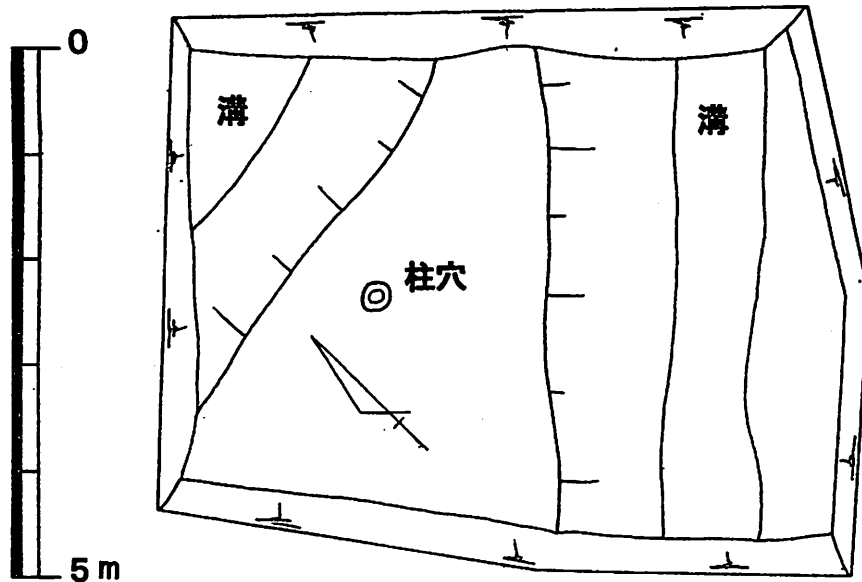
3. 下之郷遺跡の調査

個人住宅建築に伴って、下之郷三丁目字金影で2件の試掘調査を実施しました。

第1地点

造成土など約0.9mまでの土層を除去し、黄色シルト層の上面で遺構検出を行った結果、2条の溝を検出しました。調査区の東側で検出した溝は、宅地造成に伴う道路部分の調査で検出された溝の延長部分と見られ、中世の屋敷地の周りを巡る区画溝くわくこうと考えられます。

調査区北隅でも東西方向に伸びる溝の一部が検出されており、調査区西側に向かって遺構が伸びることがわかりました。(伴野)



◀ 第1地点 遺構平面図

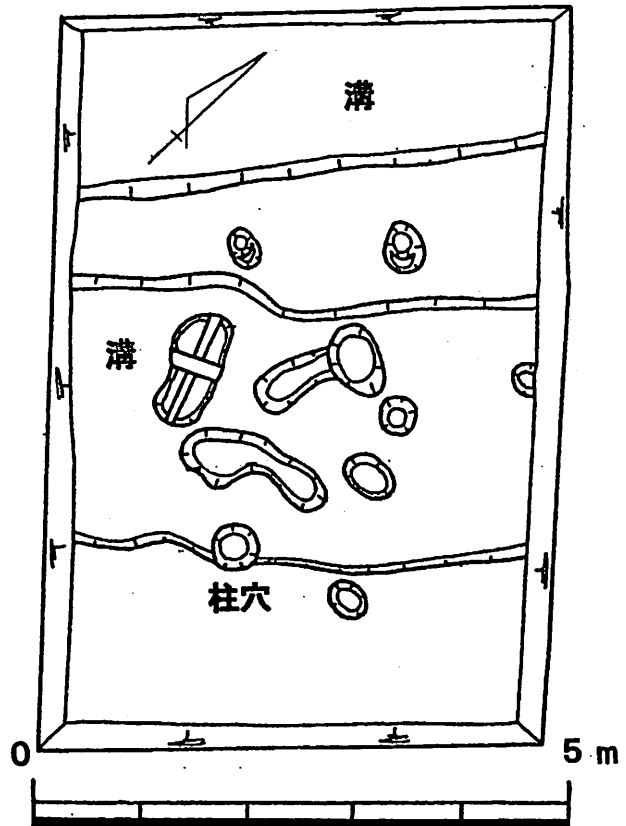
第2地点

調査地は第1地点に隣接する場所で、中世の屋敷地の内側にあたる地点です。

見つかった遺構は、南西から北東方向に伸びる浅い溝2条と柱穴、土坑が見つかりました。掘立柱建物の柱穴とみられ、直径約0.4m、深さ約0.3mを測り、しっかりとした掘り方です。

第1地点で検出された区画溝と道路部分で検出された溝からみて、一辺約70mの屋敷地と推測されます。

周辺の調査状況からみて、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落がこの一帯に営まれていたことが想像されます。(伴野)



▲ 第2地点 遺構平面図